



昭和二年の島崎藤村

村上 文昭

二〇〇七年八月二十二日、小諸市立藤村記念館では、第六十五回藤村忌「花と歌を捧げる集い」が催された。市民ら約二百人が藤村の胸像前に参列し、花を供え歌声をひびかせて作家の足跡を偲んだ。

本稿は当日の講話を要約したものである。

小諸市民にとって象徴的な「千曲川旅情の歌」の碑が、小諸城址の懐古園の一隅に建ったのは、昭和二年七月二十四日であったから、今年はずうど八十年にあたる。

八十年前の島崎藤村は五十六歳の初老に達している。ここ二、三年は代表作といえる大作こそ発表していないが、『春を待ちつゝ』(大正十四年)のような感想集、『仏蘭西だより』(大正十三年)ほかの紀行文、幼くして母を亡くした子どもたち四人をモデルにした成長と巣立ちを、作家である父の心境を通じて描いた『嵐』(大正十五年)などを書き上げている。

こうした執筆の合間にも、つぎの畢生の作品となる構想を着々とすすめていた。これこそがのちに『夜明け前』となっていくものである。

三月の読売新聞は小諸城址に藤村詩碑が五月に出来上がると伝え、五月の朝日新聞も「麦青い六月始め建碑式」を行うと報じた。

そもそも城址の懐古園から千曲川を見下ろすところに藤村の詩碑を建てようという声はかなり以前からあって、鷹野つぎの夫の鷹野弥三郎が発案者の一人ときく。

主な名前をあげるだけにとどめるが、正宗得三郎、有島生馬、高村豊周、小山周次らが奔走や協力を行った。寄付に応じた人は小諸町民を中心に六二三名にもものぼった。

詩碑は高さが二・六メートル、横幅が三・三メートルという大きなもので、懐古園からはほど近い千曲川五里淵から六十人がかりで運び上げたという。碑面は高村豊周が藤村の筆跡を鑄造したパネルをはめこんだものである。

実際の除幕式は五月でも六月でもなくて、七月二十四日を迎えるまで遅れた。

ここでひとまず藤村の七月の動向に触れてみよう。この月は小諸の詩碑建立のほか、作家にとって意義ある二つのことが重なった。

まず岩波文庫の創刊がある。創刊にさいしての「読書子に寄す」はつぎのように書き出され

ている。いまも岩波文庫に入っているので広く親炙しんしされた名文だ。

眞理は万人によって求められることを自ら欲し、芸術は万人によって愛されることを自ら望む。

実に高尚で格調ある文章は、万人の心を快く刺激しないではおかないだろう。

長野県人の岩波茂雄の出版理念を体現した廉価でハンディな文庫の創刊は、七月十日のことである。創刊の二十三点のラインアップの中には、漱石の『心』のほか藤村自選『藤村詩抄』と島崎藤村編『北村透谷集』の二点が収まった。(その十月になって『千曲川のスケッチ』も加わった)。

文庫のため藤村は旧詩に目を通し、詩句を改め取捨選択しながら読み直したし、序として長い透谷論を書き加えた。これらの文章のためにも数ヶ月は費やしたことであろう。

本年は岩波文庫の創刊から八十年にあたる。

一方で藤村は大阪朝日新聞から山陰への旅行と紀行文を依頼されていた。この旅には二男の鶏二を連れていくことにした。彼はまだ二十歳だが、洋画家を目指している。訪れる先々の息子のスケッチを、自分の紀行文に使えればと父は考えてのことだったろう。

七月八日の城崎温泉を皮切りに作家の父と画家の卵の息子は鳥取、松江、出雲大社、益田、津和野まで西下していった。

七月の盛夏の中を、全通してまもない山陰本線を利用した。途中下車するごとに地元の名士らが、名高い作家の父と子を出迎えてくれた。そして時間刻みに名所を案内してくれる。訪れる先では用意の色紙に揮毫を求められた。

宿に入れば暑さと疲れで、すぐ休みたいが、誰彼かが宿を訪ねてきた。

あまり健康とはいえない近年の藤村だが、この旅では胃腸をこわしてしまう。予定の日程を変えたりしたが松江では五日も滞在してしまったほど。

益田と津和野までの旅程は五五〇キロの長さ、今日の新幹線なら東京—新大阪間に相当するが、この長い距離を七月十九日まで十二日間をかけて進んだ。さぞかし苦しい旅だったことだろう。

帰宅したのは七月二十日か二十一日だろうか、疲労困憊の極みに達していたかとおもわれる。これが原因で風邪をこじらせ、さらにインフルエンザにかかった模様である（父に同行した鶏二が馬籠にいる長兄に手紙で知らせている）。

連載開始は帰京して一週間もない七月三十日からになった。作家魂というのか藤村の意志の強さによって三十七回も連載をつづけた。紀行文は「山陰土産」と題され、ときどき鶏二のスケッチが父の文章を飾った。

小諸の詩碑の除幕式にもどれば、山陰から帰京して三日後になるが、本人は出席せず、代わりに長男の楠雄と三男の翁助が参列した。

詩人の福田正夫が読売新聞に寄せた文章を引用すると一。

式をはじめた時分には、詩情の深い雨がしとしとと青葉にふりそぐいであつた。有島氏の挨拶の後、楠雄さんの除幕で青銅の印刻詩碑面が鮮かに藤村先生自筆の「千曲川旅情のうた」小諸なる古城のほとりを浮かび上がらせて、拍手が千曲川の水音とやはらかに共鳴する。

列席者の多くは当の詩人がいないことを淋しくおもったことだろう。どれだけの人が藤村は紀行文の執筆に追われてとか体調がおもわしくなくてと思っていたらどうか。詩人は鶏二と山陰に出かける前から不参を決めていたようである。

五月二十二日の東京朝日に「消息（私の詩碑について）」という随筆が載った。そこから抜書きしてみよう。

あれは土地の風物に因んだ詩の碑であるし、建てられるといふ場所も自分の郷里の方ではなくて、小諸である。ありのままに言へば、私は自分に過ぎた記念碑などを建てられても、そんなにうれしい

とも思はない。（中略）

あゝいふ風にこれから先も長く残るものを個人としての私の記念碑のやうに思はれては、心苦しい。さういふ意味のものなら止して呉れたまへ、私は堅く辞退すると言つて、最初からそのことを発起人諸君に断つて置いた。

そもそもからして素直でない。彼一流の持つて回つた言い方だ。自分の詩碑に違いないのだから、ありがとうと言へばよいものを。小諸の町民の好意に水をささないともかぎらないのに。

最近になって読んだ加藤千代三の『流離の人——回想の島崎藤村』によると、別の理由をあげたという。この加藤という人は、藤村の推挽で岩波書店に入ると、折からの文庫の『藤村詩抄』などの編集を担当した。作家と編集者の関係で、加藤は書齋に上つたときの雑談を回想している。小諸の詩碑のところ。

「小諸にできた詩碑の写真を送つてきた。なかなかどうして立派なものだ」

かなり大きな写真であつた。……さも嬉しそうであつた。これまでみたこともない明るい微笑がそこにあつた。（中略）「除幕式のようなこともさかんにやつたらしい。……詩碑もよく撮れている」（中略）

「ところで除幕の式になぜ出席にならなかつたのですか」

その途端、眼鏡の奥できらりと眼が光つた。

「いく必要はないさ。なぜわたしが出かけるなければならないのだ」

……

「小諸の人たちが建てたものだ。まあそのうちに苔でも生える頃がきたら、見せて貰いにでかけるさ」

このあと不参の理由の一つに除幕の日に藤村庵という茶店を開いて藤村だんごを売り出すことをあげたという。

こんなに劇した口調の藤村が描かれていようとは。筆者の加藤は上手に作家の心情を書きとめている。きっと気易い編集者だったから、駄々

っ子のように話したのかもしれない。小諸のみなさんには申し訳ないようなことばである。

加藤千代三は藤村が小諸でくらしした七年間の苦いあれこれをおもうと、二律背反する矛盾で揺れていたことであろうと、その理由の数かずをあげて付度している。

「まあそのうちに苔でも生える頃がきたら、見せて貰いに出かけるさ」とっていたのに、翌年には加藤静子と再婚し、さらに翌年の昭和四年六月はじめには、夫人と同伴で自分の詩碑と対面したのであった。

いまから八十年前の昭和二年の藤村は千曲川の自作詩碑の除幕式に不参加でも、創刊の岩波文庫の『藤村詩抄』と『千曲川のスケッチ』がいまも同文庫で絶版になることなく読めるというのは、八十年後の記念になっている。きっと小諸の市民に対する満腔の謝意であるかもしれないとおもっていただけまいか。

また同年の『山陰土産』の旅からは、その後の藤村の自然観や日本観に対して大きな影響を与える収穫をあげて、『夜明け前』や『巡礼』といった作品に昇華していったことがわかる。

このように、昭和二年の島崎藤村は、この七月を中心に実りある一年を送ったといえよう。

(むらかみ ふみあき 協力研究員)



胸像前での藤村忌——小諸市で